



「4mの津波がくるという町内放送を聞いて安心していたら、2回目の津波が10mを超えるものだったので急いで町役場に逃げようと、あの坂を登っていたら町職員に手を引つ張られてなんとか助かったんだ」33年間、山田町役場の警備と電話番号を担当し、現役を退かれた現在、リウマチのため杖をつきながら町役場の右隣奥のコミュニティセンターで避難生活を送られているSさんは3月11日の惨状を淡々とした口調で伝えてくれた。

けっぱれ 東北連合 — 東日本大震災の地をたずねて —

情報広報部

橋本 洋一

町役場から海に向かって足を運ぶと6mの高さの堤防の左端が根こそぎ取られ、想像を絶する津波の破壊力を見せつけられた。JR陸中山田駅は津波に加えて火災のため、原型を留めていない。高台にある町役場周辺の建物群だけはほぼ無傷で、役場の左に位置する旧県立山田病院で地元の開業医のK先生が仮設病院で診療にあたり、平成18年に新築された県立山田病院の1階部分が一部破壊され、入院機能を維持できず外来診療のみを始めて

いた。役場の右隣の保健センターに置かれた救護所本部に我々北海道JMATと千葉JMATが交互に詰め、東京済生会、和歌山医大の医療スタッフが巡回診療を展開していた。看護師不在時に県立山田病院から夜勤に駆けつけてくれた看護師さんの話によると、地震発生直後の約30分のうちに寝たきりの高齢者約40人に上着を着せてシートにくるみ屋上に運び、津波が退いた夕方に再び病室に戻し、犠牲者を一人も出さなかったとのこと。

「とにかく必死でした」という彼女の臨場感あふれる言葉を聞いて、県立山田病院の医療スタッフの緊迫した中での迅速な対応に頭が下がる思いがし、同時に日頃の災害実

地訓練の必要性を改めて強く感じた。元亀3年(明治29年)までの327年間に89回もの津波が三陸海岸に押し寄せたという記録が岩手県沿岸溺死集に記載されている。宮沢賢治が生まれた明治29年に起きた明治三陸地震津波の後で、その被害踏査を自ら県庁に願い出て、40日間に亘って炎天下の中、陸前高田から九戸郡洋野町に至る700kmもの距離をワラジで調査した山奈宗真という遠野の起業家がいいた。山奈の調査記録は公開されて

いないが、客観的な事実に基づいた正確な被害状況が記述されていたらしい。吉村昭氏の『三陸海岸大津波』に書かれた明治三陸地震津波同様に、今回の地震でも船越湾と隣接した山田湾との間に突き出た小さな半島で想像を超えた波高の津波が襲い渦巻き状となり、その地にあつた老健施設が全滅し、過半数を超える高齢の入所者と13名の職員が犠牲になった。2階建ての老健施設は、柱を残すのみで全壊の様を呈し、「准看護師であつた長男の嫁が流されてまた遺体を確認できず、上の5歳の孫がお母さんはどうしたのと聞いてきて返答に窮している」と涙ぐみながら話されたお婆ちゃんに、返す言葉が見つからなかった。

日本国民一丸となつて被災地の復興に対処すべき時に、総理大臣を退いた時に議員辞職を公言した元総理が現総理をペテン師呼ばわりし、離党もせずに野党が出した内閣不信任案に賛成票を投じた議員が確固たる意志を貫き通したとマスコミに登場し、その一方で良識のひとかけらもない野党が大義ない政争にあけられている。被災地の声と遊離した国政とは別に良識ある被災地の知事達の発言を聞いて被災した3県が東北連合を結成しこの未曾有の国難に立ち向かうべきであると考えた。けっぱれ、東北連合。